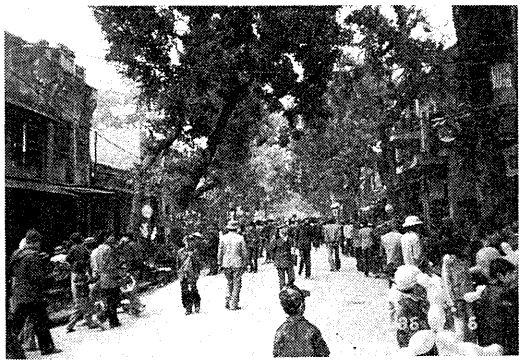
天気のよしあし

栗原浩英



テトの直前，花市でにぎわうハノイ(1986年2月)

天気が「よい」とか「わるい」という判断は，風，雨，晴れ，くもり，雪など一定の気象状態の判断とは異なって，その地域の気候全般，文化，さらには判断主体の属する社会集団と密接に結びついている。これをベトナムの首都ハノイについてみると，私の体験からいえることは，季節を問わずまずくもっていることがよい天気の不可欠な条件である。しかも，冬の使者ともいうべき1月から2月にかけての霧雨（ムアフン）すらも，好天を構成する一要素として歓迎されるのである。これに対し，晴天は常に「乾燥」「旱魃」という概念と結びつけてとらえられ，晴れたところで人々はよい顔をしない。

ひとつには，太陽はいつも天井ほどの至近距離にあるといっても過言ではなく，一旦顔を出せば大地に，人間に容赦なく強烈な光線を浴びせかけるという事情がある。6月ともなれば，日中の気温 36℃，湿度 85% という日が続く。このようなとき，太陽の下を自転車で走りまわらなければならない市民や農作業にいそしむ農民の苦労には，はかりしれないものがある。雲が太陽をかくせば，気温は 3〜4℃ はさがるから誰しも歓迎するのは当然といえるだろう。1987年3月，ゲティン省の海水浴場クアローを訪れたときは，日本流にいえば雲が低くたれこめて，なんともさえないとしかいいようのない日であったが，ハノイから同行したベトナム人が「天気がいい」と子供のように大はしゃぎをしていたのが思い出される。ベトナム北部で「春（スアン）」とよばれ，気温が急上昇を開始する3月は天候がきわめて不安定なため，人々の天気に対する反応の変化をみるには最適である。それからすると，25℃ から 30℃ でくもっていれば最高の天気ということになるようだ。

これだけのことなら，日本でも夏に同じような経験をしたことがあるという人も多いだろう。しかし，ハノイの人たちは空があつい雲でおおわれ，霧雨がふる冬季でも，たまにおとずれる晴天の日をよろこびはしないのだ。ちなみに最寒月である1月の平均気温は，16.5℃ にまでさがり，厚着をしないと寒くてしかたがない。霧雨がふれば，自転車での往来もたいへんなことになるのはいうまでもない。にもかかわらず，彼らは晴天よりはましと考えているようだ。

留学してまもない1986年のテト（旧正月）のとき，久しぶりに雲がどいて青空がひろがったので，私は友人につい日本式に「今日はいいお天気ですね」と挨拶してしまったら，即座に「これはいい天気とはいえない」という答えがかえってきた。彼によれば農作物の生育によくないというのである。ほかにも，霧雨がふってこそテトだという人もいた。たしかに，この霧雨は冬季の乾燥をおさえ，紅河デルタのイネの二期作を可能にする恵みの雨にほかならない。1986年〜87年の冬は晴天が続いたため，イネの収穫高は前年に比べて大幅減となった。現象的には日本の梅雨とよくにているが，日本の都市居住者で空梅雨は好ましくないということを知っていても，農作物に思いをやりながら，雨の日に「天気がよい」という人がいるだろうか。

ハノイの人たちが農作物と天気を結びつけるのは，彼らの半農民性，または都市と農村の未分離にねざすものと思われる。彼らのほとんどが，出身地，係累の居住地，戦争中の疎開地などの形で農村との接点をもつうえ，生活防衛のために豚や鶏を飼育している。それに日々の糧の確保は依然として彼らの最大の関心事である。そのために，晴天が続けば自分たちの生活にどう影響するかをストレートに感じとるのであろう。

北部と気候の異なる中部や南部では天気のよしあしがどうなるのか，ベトナムに行く機会があったらきいてまわろうと思っている。